

あしやどうまんおおうちかがみ 芦屋道満大内鑑

〔解説〕

竹田出雲(たけだいずも)作。享保一九年(一七三〇)大阪竹本座初演。全五段の時代物。陰陽師安倍晴明(あべのせいめい)の出自が題材となっており、特に「葛の葉子別れ」が有名です。

〔あらすじ〕

陰陽道の大家・加茂保憲(かものやすのり)の死後、朝廷は芦屋道満(あしやどうまん)と安倍保名(あべのやすな)のどちらかに秘書『金烏玉兔集(きんうぎよくとしゅう)』を受け継がせることとしました。しかし、秘書が保憲の養女で、安倍保名の許嫁でもある榊の前の寝所から盗まれてしまいます。その為に榊の前は自害し、保名は正気を失うのですが、信田の森で榊の前と瓜二つの葛の葉(くずのは)に出会い、正気に戻ります。二人は夫婦となり男の子をもうけますが、六年後にもう一人の葛の葉が訪ねてきて、妻である葛の葉は、実は以前助けた狐の化身であるとわかります。正体を明かして、信田の森へと帰る狐の葛の葉、葛の葉を慕う保名と子供は後を追うのですが、そこへ保名を襲う悪漢たちが現れます。しかし狐の霊力によって悪漢一味は追い払われるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

葛の葉子別れの段

ついたる折からに

立歸る安倍の保名それと見るより

「ヤア庄司殿御夫婦か」

「お身は保名か、なう懐かしや」

「懐かしや」

「イヤそれはこの方も御同然。まづ奥へ、いざ御案内」

と立つ袂をひかへ

「まづ〜急に渡す者あり、コレ預りの葛の葉連れて

参った。渡しまうす聳殿」

と引合されて葛の葉は、さすが二人の親の前いはで心
を知らかしの、顔に会釈ぞこぼれける。保名大きに痛

み入り

「これは〜、拙者が留守のうちはや葛の葉に御対面

なされ衣服を着せかへ今連れて来たやうに見せ、この

保名を困らせてお笑ひなされうためか。女房も女房今

初めて来たやうに、所体をつくつてなんぢやの、ア

ハ、ハ、ハ、この申訳こそ段々、御息女葛の葉と夫婦に

なりこれにあること、先年信田の宮にて悪右衛門狼藉

の時、すでに事難儀におよび生害仕らうと存ずるとこ

ろへ、早速この人が駆付けさまぐの介抱。それより

一緒に立退き所々漂泊し、此所の住居はや五年。安倍

の童子とまうす五歳の男子をまうけ、おとなしく生立

ちまうすにつけ、これを力にお詫びまうさば、孫に免

じわが不行跡御免もあらうか、今日は参らうあすはお

詫びに参らんと、口ではまうせどもなにか所存に任せ

ず、一日々々と相延び今更お詫びまうさう詞もない。

重々の不調法孫に免じ御勘忍あるやうに、母様お取り

なしなされ下され」

と、身を投伏して詫びにける。

「イヤサ言訳どころでない。来て見れば不思議たらふ。まづあの機織る人をひそかに覗いて見ておぢやれ」

「げにも／＼女房はこゝにゐる、誰が機を織るらん」とつぶやきながら立寄つて、そつと覗いてびつくりし、色を違へ立帰り

「あそこにも葛の葉こゝにも葛の葉。コリヤどうじゃ、こは／＼いかに」

と顛倒し、奥を見ては呆れ顔こなたを見ては興覚め顔、物をもいはず立つつゝあつ思ひがけなき驚きにたゞ茫然たるばかりなり。

「フ、当惑の体至極せり。われも信田にて別れし後悪右衛門が讒言ざんげんにて、重代の所領没収せられ、吉ミの山の片里に世を忍び住むそのうちに貴殿のことを恋慕ひ焦れ煩らふこの娘、五年の年月いろ／＼看病肝を焦

すところ、不慮にこの頃貴殿の在所聞くとひとしく、

忽ち病氣平癒し夫婦が召連れ来て見れば、思ひも寄らぬ二人の葛の葉けふもあすも覚め果てしが、退いて分別するに離魂病といふ病あり。俗には影の煩ひといい形を二つに分くるといへども、それも一つ軒をば離れず、時々形を合すといへばそれでもなし。正しくこれは変化の所為か又は天狗の業なるべし。わが娘に引合せ誠をもつて理を押しさば、忽ち姿を現すべし性根を忘ずるところでなし。保名心をつけられよ」

「氣をつけ給へ賀殿」
と、夫婦力をつけ給へば

「仰せ迄も候はず、われも加茂の保憲に随ひこれしきの邪正をたゞすこと、一句一指の手段にあり。きつと証しるしを見せまうさん。各々は暫しのうち、見苦しくともこの物置にひそかにお忍び下さるべし」

と、余儀なき詞に人々も

「構へて仕損じ給ふな」

と危ぶ心の物置の簾を上げて忍ばるゝ。保名異なき風情にてうちに入り

「これはく坊主めがあがき草臥れ、この踏反つて寝た姿なりわいの。童子が母はおはせぬか今帰りし」

と呼ばれば、前垂たすき襷取りあへず

「いつより今日のお帰りはおそかりし。お肌寒にはなかりしか」

「イヤく空も暖かに住吉へ参詣し、帰りは例の天王寺、なう思ひも寄らず六時堂の前、お身の父庄司殿御夫婦にはたと行逢ひ、日頃の不屈胸につまつて挨拶をしかねたれば、あちには、一向恨みの気もなく、在所を聞いたゆゑ娘に逢はうため、尋ね来れども見る通り連れ衆もあり、この衆を片付け日暮にはこれへ参らう。

食物の用意は無用洗足の湯を頼むとモなかく心解

けたる挨拶、一つ二つ物いはうと思ひしが、かいつまんでも五年の話思はず時を移いた。お身も久々の対面さぞ悦び。身も大慶」

と物語れば

「それはなによりお嬉しや、日暮とて間もなし。用意無用とのたまふとも、なんぞせぜばなるまいか」

「イヤく孫をつき出しお目にかけるが馳走の一番。お身も髪に櫛でも入れ衣服も着かへ、しをたらとした体を見せませぬ、それが馳走の第二番、サはやうく身は夜と共の物語。この草臥れでは続くまい日暮迄一睡せん」

と、いひつゝ女房の形風情見れども驚く体もなく、髪とり上ぐるその姿

「どっこに一つ言分なし。たゞしは娘を連れて来た庄

司夫婦がなんぞではあるまいか」

と、迷ふ心の奥の間に忍びて事を窺ひける。妻は衣服をあらためてしを／＼と奥より出で、臥したる童子を抱きあげ、乳房を含め抱きしめていはんとすれどせぐり来る、涙は声に先立ちて暫く咽び入りけるが

「恥しや浅ましや年月包みし甲斐もなく、おのれと本性あらはして妻子の縁をこれ切りに、別れねばならぬ品になる。父御にかくといひたいが互ひに顔を合せては、身の上語るも面伏せ。御身寝耳によく覚え父御にかくと伝へてたべ。われはまことは人間ならず、六年前信田にて悪右衛門に狩出され、死ぬる命を保名殿にたすけられ、再び花咲く蘭菊の、千年近き狐ぞや、あまつさへわれ故に数ヶ所の疵を受給ひ、生害せんとし給ひし命の恩を報ぜん」と、葛の葉姫の姿と変じ、疵を介抱自害をとどめいたはり附添ふそのうちに、結ぶ

妹背の愛着心夫婦のかたらひなせしより、夫の大事さ

大切さ愚痴なる畜生三界は、人間よりは百倍ぞや。殊

におこ事を儲けしより右と、左に夫と子と抱いて寝る

夜の睦言もゆふべの床を限りぞと、しらず野干の通力

もいとし可愛に失せけるか。今別るゝとて父御前の業

でもなく、元より名を借り姿を借りし葛の葉殿、恩は

あれども怨はなし。庄司殿御夫婦をまことの祖父様祖

母様、葛の葉殿を真実の母と思つて親しまば、さのみ

憎うもおぼすまじ。悪あがきをふつと止め、手習ひ

学問精出してさすがは父の子ほどあり、器用者と誉め

られよ。なにをさせても埒あかぬ道理よ狐の子ぢやも

のと、人に笑はれ誹られて、母が名迄も呼出すな。常々

父御前の虫けらの命を取る、碌な者にはなるまいと

たゞ仮初のお叱りも、母が狐の本性を受継いだるか浅

ましやと胸に釘針刺す如く、なんぼう悲しかりつるに、

成人の後迄も小鳥一つ虫一つ、無益の殺生ばしすなえ
必ずく別るゝとも、母はそなたの影身に添ひ、行末
長く守るべし、とはいふものゝ振捨てゝ、これがなん
と帰られう、名残りをしや、いとほしや、放れがたな
や、こち寄れ」

と抱上げ、抱付き抱きしめて、思はずクワイと泣く声
に、保名一間を走り出で

「仔細は聞いたりにゆゑに、童子を捨てゝやるべき」
と呼ばゝる声に庄司夫婦、葛の葉も転び出で

「放ちは遣らじ」

と取付けば、抱きし童子をはたと捨て形は消えて失せ
にける。庄司目をしばたゝき

「エゝさて夢ばかりかくと知つたらば、ふかく尋ね
来ずとも仕やうもやうあるべきに、無惨の次第を見る
ことや」

と、夫婦が悔めば葛の葉も手持無沙汰に見えけるが

「アゝさうぢや、なにはともあれかくもあれ、自が姿
となり自が名を名乗り、産んで貰ひしこの坊はとりも
なほさぬわが子なり。父様母様お前方のためにも、真
実の孫ぢやと思つて下さんせ。コレ坊ンち今からこの
母が身に代へていとしがる。今迄の母様のやうに、母
様々々としなつこしう頼むぞや。ヲゝよい子や」と抱
き給へば乳を探して

「イヤく。この母様はそでない」

と膝を這下り見廻して

「母様々々」

と呼ば叫べば、保名堪えかね大声上げ

「たとへ野干の身なりとも、物の哀れを知ればこそ五
年六年付纏ひ、命の恩を報ぜずや、いはんや子迄まう
けし仲。狐を妻に持つたりと笑ふ人は笑ひもせよわれ

はちつとも恥しからず。別るゝと相對にて互ひに合点
のその上は、失せもせよ消えもせよ、このまゝにては
いつ迄も、放ちはやらじヤア葛の葉。童子が母よ女房
よ」

と間の襖を引明くれば、向ふの障子に一首の歌、

『恋しくば、尋ね来て見よ和泉なる信田の森のうらみ

葛の葉』

「ハアさては一首の記念をかたみ残し、つれなうも帰りしな、

われに名残りは残らずとも、童子は不便に思はずか」

と、奥に駆入り表に出で狂氣の如く駆けめぐれば、童

子も父の跡につき

「母様どこへいかしやつた。母様なう」

とかっぱと伏し声をはかりに足摺りし身を悶え歎く

にぞ、庄司夫婦、葛の葉も、共に哀れに取乱し前後不

覚に歎かるゝ。庄司歎きを止めんと思ひ

「ヤア保名不覚なり。狐ばかりが葛の葉で、わが娘は
葛の葉ならずや。殊に残せし一首の歌、恋しくば尋ね
来て見よと詠んだれば、いつでも信田へゆけば出合ふ
に疑ひなし。エ、未練散々卑怯至極」

といさむるところへ、けさより立ちまふ木綿買一つに
なつてつつと入り

「ヤア安倍の保名、葛の葉、信田の庄司、見付けた／

ゝ。かくいふは石川悪右衛門殿家来、荏柄の段人」

「信楽雲蔵」

「落合藤治」

「主人の御心をかけらるゝ葛の葉を隠しをく、保名は
まおとこ密夫同然、討殺して姫連来れと、この頃こゝに徘徊し

今日出喰はせたは百年目」

「女房があつても首がなうては済むまい。畏つたと葛
の葉を渡せ／」

と呼ばゝったり。老人夫婦足弱の殊に歎きに気も後れ、
途方にくれて立騒ぐ、保名『はっ』と心付き

「まうし／＼騒ぐまい。葛の葉は童子を抱き御夫婦を
介抱し、裏口を出て影隠した、遠へ逃ぐるにおよばず」
と、裾引っからげ突立ちあがり

「ヤア愚者に向つて返答なし。葛の葉がほしくばこの
保名を首にして連れてゆけ、サア来い」

と、形見こそ今は仇なれ幸ひと、織りかけし布機の招
き掛板、卷竹よちぎりひおき膝わく杼ひ箴おきよわく框わくなど、はづみを打つて
投げかけ／＼、ためらふところを

「まっかせ」

と親機『えい』とこぢ放し

「科ある者を成敗のはつつけ磔はつつけといふはた物の、塩梅見よ」
と振廻し日頃には似ぬ強勢も、狐や力添へぬらんはげ
しかりける働きなり。落合は逃仕度、段八、雲藏生兵

法、肋と眉間に大疵受けのたり廻つて死してんげり。
人々駆出で

「手柄々々」

と勇めども、葛の葉は勇みなく

「なにをいふても私に、乳がなうてはいつ迄もこの子
が馴染まうやうがない。あつちにあつても入らぬ乳貰
ふてほしい」

と泣きければ

「ヲ、道理々々それ迄もなく一度は尋ね逢はではか
なはぬ義理。夜道をゆくもたど／＼し明けなば夫婦童
子連れ」

尋ねて来ませ和泉なる信田の森へとしたひ行く。